奄美大島南部

朝花節（あさばなぶし）

唄・相方ハヤシ・三味線：武下　和平
唄・相方ハヤシ：森　チエ

詞章１

＊２番以降歌詞のみ

ハーレーイー　まれまれなきゃばうがで
（イチヌカランヨ　ヒルヌカランヨーイ）
ハレーイー　なまなきゃうがむば
ヨーハレー　にゃいてごろうがむかい

共通語訳

久しぶりにあなた方にお会いしましたが、今お会いすれば、今度はいつお会いできるでしょう。

詞章２

うもちゃんちゅうどしんじつやらな
いしわらくみきち　うもちゃんちゅうどしんじつやらな

共通語訳

いらっしゃったことこそ真実のあらわれです。石原を踏み越え、いらっしゃったことこそ真実のあらわれです。

詞章３

うがまんちゅむうがでしりゅり
いのちながむてうりば　うがまんちゅむうがでしりゅり

共通語訳

会ったことのない人にも、会って初めて知ることができます。命を長くしていれば、お会いしたいと思う人も、会って初めて知ることができます。

曲目解説

本集には、奄美大島北部と喜界島、徳之島のそれぞれの「朝花節」（喜界島「朝花」、徳之島「島朝花」）も収載されていますが、この唄ほど、地域によって節回し（メロディー）が違う唄はないといわれています。特に、奄美大島と徳之島では、これがもともと同じ唄であったとは思えないくらいに違っています。島唄には楽譜などがなかったために、それだけその土地に溶け込み、個性化したともいえます。

奄美の島唄は基本的に、掛け合い（唄問答）で歌われました。既成の歌詞をその場、その時に応じて出したり、時に即興でつくられたりすることもありました。古老の話では一晩中「朝花節」だけで続くことがあったといいます。この唄の最初につく「ハレー」とか「ハレーカナ」（奄美大島北部が多い）というハヤシコトバは、これを長く引っ張って歌いながら、次に歌う文句を考えたのだ、という人もいます。

奄美の唄の音数律（詞の形）は、８８８６調といわれる琉歌調歌詞が主流を占めるのですが、「朝花節」はほとんど、伸縮自在の自由形（不定形ともいいます）ですので、日常の言葉に近くなります。（曲名の由来などは、喜界島「朝花」、徳之島「島朝花」の解説を参照してください）

歌唱者

武下　和平（たけした　かずひら）昭和８年生まれ。瀬戸内町諸数出身。
森　チエ（もり　ちえ）大正１０年生まれ。瀬戸内町網野子出身。

糸繰り節（いとくぶし）

唄：中野　律紀
相方ハヤシ・三味線：築地　俊造

詞章１

＊２番以降歌詞のみ

しわじゃしわじゃー
いとくりしわじゃィー
（スラーヨーイ　ヨーイ）
いとぬきりりば　スラヤヌーヤー
むすばりゅむ
トコーヤヌースラヤヌー
バイードガージュイジュイ

共通語訳

心配です、心配です。糸繰りは心配です。
糸が切れてしまえば、結び直しができましょうか。

※「しわ」は「世話」が訛った言葉で、人の世話をすることは心配することに通じるため、この意味を持つようになりました。

詞章２

いとやきりりば　むすびむなりゅり
えんぬきりりば　むすばりゅむ

共通語訳

糸が切れたら、結ぶことも出来ますが、人との縁が切れてしまったら、結び直しはできません。

詞章３

いとくりいちばんな　さねさだやくめ
にばんなりゅんちゅや　ちよあせぐぁ

共通語訳

糸繰りが１番上手な人は、実定兄さんです。
２番の人は、千代姉さん。

※２人は実在の人でしたが、「実定」「千代」という当て字は定かではありません。

曲目解説

薩摩藩支配の時代、今の奄美市名瀬に藩営の糸取り所があり、そこで歌いはじめられたといわれています。

歌詞は、奄美の方言なのですが、７７７５調という本土に多い形であり、この曲自体も鹿児島本土から入ったものではないかと想像されます。ですが、もとの曲は特定されていません。この唄のハヤシコトバ「トコヤヌスラヤヌ　バイドガジュイジュイ」（意味不明）が、いつか原曲を探す、キーワードになるかもしれません。

ともかく、今は若い人にもよく歌われ、奄美島唄の代表曲ともいえます。

ところでこの唄は、「糸繰り節」になる前は、砂糖きびから黒糖を生産するときの唄として歌われたようです。砂糖きびを地上から高く刈り取ると、砂糖の量が減るため、罰板をつけられる、といった歌詞が残っています。

唄の文句は、時代によってすっかり変わることがあり、それに伴って曲名

も変わるものでした。

中野律紀さんは高校時代に第１３回日本民謡大賞（平成２年　日本テレビ系列）に出場し、「むちゃ加那節」を歌い日本一になりました。

歌唱者

中野　律紀（なかの　りつき）昭和５０年生まれ。瀬戸内町古仁屋出身。

うらとみ節（ぶし）

唄：中山　音女
相方ハヤシ・三味線：重枝　豊人

詞章１

ハレイきょらさうまればヤ
どし
（スラヨイヨーイ）
しににくまれて
（スラヨイヨーイ）
どしににくまれて
（どしににくまれて）
ハレーきもちゃげむちゃかなや　ヤレ
しゅな
（ヨイサヨイヨーイ）
みにひきゃされて
（スラヨイヨーイ）
しゅなみにイひきゃされて

共通語訳

美人に生まれたために、友だちに憎まれてしまいました。可哀そうにむちゃ（女性名）かな（愛称）は、潮波に引かれてしまいました。

※むちゃかなは、そのまま亡くなってしまいます。曲名になっている「うらとみ」は、彼女の母といわれています。

曲目解説

うらとみ、むちゃかな、という母娘の悲劇的な伝説を歌った唄です。

もっともよく知られた伝説によると、薩摩藩支配の時代、加計呂麻島の生間という集落に、うらとみという美人の娘がいました。あるとき、薩摩から派遣されてきた代官が、彼女に目を付け、島妻（あんごーといわれていました）にしようとしました。ところが、うらとみには当時、許嫁の青年がいたようで、島妻になることを断りました。ですが、代官といえば時の絶対権力者です。断られた腹いせに、何かにつけ集落に対する嫌がらせをするのでした。これに困り果てた親たちは、うらとみをわずかばかりの食料とともに小舟に乗せ、島から脱出させました。そして、幸いに漂着したところが喜界島の小野津の浜でした。ここで、うらとみは世話をしてくれた島の長（おさ）と結婚します。

そして生まれたのが、むちゃかなでした。彼女もきれいな娘に成長しますが、今度はシマ（集落）の娘たちの嫉妬の対象になります。ある時、友だちに誘われて、海にアオサ（青さ海苔）を取りに行き、岩場から突き落とされてしまうのです。それを知った母のうらとみも、我が子を探すために海に入り２人とも亡くなったという話です。

実は、いろいろな研究者がこの伝説を調べていくうちに、歴史的事実とは違うことや、この話の背景に唄を歌って歩く旅芸人的な人の存在が浮かび上がってきて、この物語にたくさんの人物が影響していることが分かってきました。

伝説も民衆が生んだ１つの作品として味わうべきだという考え方もあり、今後の研究が待たれます。

歌い手の中山音女さんは、島唄の名手として伝説的な人です。たんたんとした歌いぶりで、現在の島唄との違いがよく理解できます。

歌唱者

中山　音女（なかやま　おとじょ）明治２４年生まれ。宇検村湯湾出身。

黒(くる)だんど節(ぶし)

唄・相方ハヤシ・三味線：稲田　栄利
唄・相方ハヤシ：中村　宏

詞章１

＊２番は歌詞のみ

ハレーイー　くるだんど
ヨーハーレーイー
あまごいねがたっとー
（スラーヨイヨーイ）
くるだんど
ヨーヨーハレーイ
あまごいねがたっとー
くるだんど
（ソラーヌヨーイヨーイ　くるだんどイー）
ハレーイ　いきゃるまい
ヨーハーレーイー
しまじゅぬちゅんきゃぬ
（ソラーヨイヨーイ）
いきゃるまい
ヨーヨーハーレーイ
しまじゅぬちゅんきゃぬ
いきゃるまい

共通語訳

空が黒ずんできました。雨乞いをして願ったら、空が黒ずんできました。
大喜びです。島中の人たちは、大喜びです。

詞章２

はなぬさきゅり　みきょやまさくなんじゅ　せんねんから
さちみりゃん　はなぐゎぬさちゅり
なおちさかそ　あけてぬにさんがつ　わきゃやぬにわか
ち　なおちさかそ

共通語訳

花が咲いています。三京山に、千年この方咲いたことのない、花が咲いています。
移して咲かせましょう。明けて２、３月頃、私の家に、移して咲かせましょう。

※「三京山」は徳之島の山の名。深い谷の意味だという説もあります。
※三京山の花を美女に例えた歌詞とされます。

曲目解説

「黒だんど」とは、「空が黒ずんできた」という意味ですが、近年は、いつもそうした歌詞が歌われるとは限らず、曲名の意味も忘れられがちになっていました。この唄では、雨乞いをして、島の人たちが大喜びをしたという歌詞が歌われていますので、曲名の意味がはっきりしたといえます。

ところで、「黒だんど節」の詞の形は、奄美のほかの多くの唄のように８８８６の琉歌調ではありません。この唄は上の句と下の句がはっきりと区別されていて、それぞれ５７５調（７音は８音になっている場合も多い）か、５７７５調（前に同じ）になっています。そして、１句目の５音とあとの５音とが同じ文句であるために、即興的に新しい文句を作りやすいともいわれています。

実際、今日残されている「黒だんど節」の歌詞を調べてみますと、近年になって作られたものがたくさんあることに気づきます。

「旗が立っている。大島の政庁に、赤条白星〈アメリカ国旗〉の、旗が立っている。それを見ている、あなたも私も日本民族、それを見ている」（共通語訳のみ）などは、奄美群島の日本復帰前、米軍政府の統治下にあったことをリアルに歌っているといえましょう。奄美の近代史を知るために、新しい歌詞を探してみる価値は十分ありそうです。

歌唱者

稲田　栄利（いなだ　えいとし）昭和５年生まれ。宇検村生勝出身。
中村　宏（なかむら　ひろし）昭和６年生まれ。宇検村平田出身。

俊良主節（しゅんりょうしゅぶし）

唄・三味線：坂元　豊蔵
相方ハヤシ：坂元　キクマツ

詞章１

うやぬイーなちうちど
くぬあかさイーハレみりゅうりイー
ヤイーリー　わぬなちゃるイルイ　ヨイー
（わぬなちゃるイヨイナ）
うやや
ひゃくさいハレーねがおイー　ヨイーレイ
わぬなちゃるイーヨーイー
（わぬなちゃるイーヨーイナー）
うややー
ひゃくさいハレねがおイーヤイレイ
イナローヨーイースーローヨーイ

共通語訳

親が生んでくれたおかげで、この明さ（世の中）を知ることができました。
私を生んでくれた親の、１００歳までの長寿を願いましょう。

曲目解説

曲名の「俊良」は男性名で、「主」は良家の主人に付く尊称です。

この録音では、歌われていませんが、この人の姓は「基（もとい）」で、明治以前の生まれで、後に奄美出身初の国会議員になった人です。

「俊良主節」としてよく歌われる文句は、彼が若いころ、新婚間もない妻のみのかな（かなは愛称）が、海に潮干狩りに行って、波にのまれて亡くなったことを慰めるものです。

泣くな嘆くな伊津部ぬ俊良主　な刀自ぬみの加那は　運命ありょてど　苦潮みしょしゃる（泣きなさんな、嘆きなさんな。伊津部〈地域名〉の俊良様。あなたの妻のみのさんは、運命があって海で苦い潮を飲んでおなくなりになったのです。）

奄美の島唄では、曲名と関係がなくとも、詞の形式さえ合えば、どんな歌詞でも歌えます。これは、もともと島唄は男女の掛け合い（唄問答）で歌われることが多かったため、その場その時に応じ、即興で歌詞を決めることが必要だったからです。本土の民謡のように、歌詞の順序がきちんと決まっていないのが普通です。

なお、「俊良主節」のもとになった曲は、仕事唄だったという説があります。

歌唱者

坂元　豊蔵（さかもと　とよぞう）明治２７年生まれ。宇検村芦検出身。